対話による鑑賞授業の広がり

－大淀桜ヶ丘小学校への訪問授業を通して－

准教授　中　川　賀　照

Nakagawa Yoshiteru

要　　旨

昨年度、武蔵野美術大学「旅するムサビ」とコラボする機会に恵まれ、「対話による美術鑑賞」を教職課程で実践することができた。その時参加されていた吉野郡図画工作美術研究会の先生から依頼があり、今年度は本学単独で訪問授業に取り組むことになった。これを機会に、昨年度の課題でもあった本学の教職履修学生のネットワークづくりを進めたいと考えた。ここでは、実施に至った経過やそれへの取組、実際の授業の様子などを振り返りながら、それぞれで得られた成果や課題について考察したい。

キーワード：対話による鑑賞授業、教職実践演習、教職履修学生のネットワークづくり

１　はじめに

帝京科学大学の上野行一教授が、平成20年から７年間文科省の研究助成を受けて実施された鑑賞フォーラムでは、「対話による美術鑑賞」が中心的に取り上げられた。鑑賞授業は、図工美術の教科としての大きな課題でもあるが、その鑑賞方法の一つとして提唱の対話による美術作品の鑑賞は、現行の学習指導要領で重視されている言語活動の充実という観点からも時勢に沿った題材である。

昨年度、武蔵野美術大学「旅するムサビ」との共同授業では、対話による鑑賞授業の手法を学べただけでなく、学生達の様々なスキルアップや教職への意欲の向上面で確実な成果があったといえる。今年度に入り、正式に吉野郡の小学校の先生方から訪問授業の依頼があり、再度これを検証する機会を得ることができた。武蔵野美術大学の取り組み方の素晴らしいところは、学部生だけでなく卒業生をも巻き込んでいる点である。昨年度、本学では教育実習を終えた２回生のみの参加であったが、その枠を超えた広がりが必要だと感じ、今回は単独の実施でもあるので、これを機にＯＢや他回生にも呼びかけるとともに、各回生にリーダーを置き縦のネットワークを構築したいと考えた。以下に、実施までの様子を報告しながら、今後の最も効果的な取り組み方について考察したい。

２　研究目的と方法

(1)　昨年度の課題を踏まえた取組

(2)　大淀桜ヶ丘小学校での訪問授業

(3)　授業実践とネットワークづくりの成果と課題

３　研究内容とその結果及び考察

(1)　昨年度の課題を踏まえた取組

昨年度の課題の一つとして、鑑賞者の発言の汲み取り方や発想の広げ方があった。昨年度は、途

中でそのことに気づき、教職実践演の中で上野行一氏の「発言に対する心構え」ポイントを取り上げたが、今年度は早期にそれらを組み込みたいと考えた。中学生位になるとよほど人間関係が図れているか指導力がないと発言を引き出すことは難しい。しかし、この鑑賞活動をうまく進めることによって、中学生でも思わぬところで心が開く場面が持てるのではないかと期待できる。

少子化によって、兄弟での鬩ぎ合いが少なくなっている現代において、他者との距離の置き方や関係の持ち方が経験不足によって上手く図れない学生が多いように思われる。主にコミュニケーション力の不足と考えられるが、本学においても大きな課題になっている。今回の取組を通じて、縦のネットワークを構築することで、学年を超えた学生達の刺激や共同作業が、それらを改善する有効な手立てになればと期待した。

ア　吉野郡図工美術研究会からの依頼とその経緯

昨年１月、ムサビとの共同授業後の研究協議の場で吉野郡研究会からの参加教員より打診があり、その後の研究会事務局での検討の結果、研修事業の一環として奈良芸術短期大学へ単独で依頼すること、実施校（参観された橋本教諭の勤務校の大淀桜ヶ丘小学校）などが決定した。また、実施時期等については後日打ち合わせすることになった。

９月６日（土）の本学での打ち合わせは、東吉野小学校の河原教諭と大淀桜ヶ丘小学校の橋本教諭、そして私の３人であった。そこでの決定事項は、２月６日（金）5･6限、大淀桜ヶ丘小学校４年生２クラス計48名を対象、研究会からの学生への交通費の補助、会場は多目的ホール、５限の15分間を使い交流を兼ねて児童と学生の名札づくり、進行役は橋本教諭等であった。幸い２月６日は、橿原学院高校の入試日のため短大は休業日である。短大の授業スケジュールは過密で、教職の体験学習といえどもなかなか余裕がないのが現状である。

学習指導案は橋本教諭が作成し、県教委の指導主事と吉野郡研究会の会長の指導を受けること、また学校長や会長と相談し、新聞やテレビ局への広報活動をそれぞれが行うこと、奈良県図画工作美術研究会へも案内をすることなどが決まった。

イ　専攻科生等への参加の呼びかけ

９月下旬、教職ＯＢに参加を呼びかけた。内訳は、一昨年度の教職履修生で専攻科及び副手として学内に残った９名、昨年度の教職履修生で専攻科及び近隣に在住している４名の計13名である。その内、10名が現在参加、２名が12月までに決定ということで、予想より多い嬉しい返事であった。それぞれの力量や状況に合わせて、①ファシリテーターと作者　②ファシリテーターのみ　③作者のみの三つ形態の中から選択できるようにし、当日までに練習が必要な人は12月６日の「教職集中講義」、12月８日からの教職２回生「教職実践演習」の授業へ自由に参加できるようにした。

今後、教職２回生には「教職実践演習」を進める中で、教職１回生には教育実習事前指導として設定している２回生との合同集中講義の際に参加呼びかけしようと考えている。教職１回生は、「対話による鑑賞授業」での重要な役割であるファシリテーターとしての十分な練習時間を確保できないため今回は、①作者のみ　②参観のみ　の二つの選択肢にしたいと考えている。そして、参加者全員での打ち合わせは、１月24日（土）14時30分にもつことにした。

ウ　平成26年度の教職実践演習での取組

「教職実践演習」での「対話による美術鑑賞」に関連する講義は、次の表２の通りである。

※ ファシリテーター → ファ、ティーチャーズキット →ティ　　表２

回	月日	テーマ	目的	内容等
4	11/1 土	**新しい鑑賞授業の在り方1**	新学習指導要領で重視されている鑑賞について、図版を用いた対話による鑑賞法を学ぶ。	・図版を用いた例 作者（宮本三郎）ファ(中川) 作者（　3　）ファ(　4　)
剣	11/8 土 3･4限 1-2-7	**発表会** **（教育実習関係）** **（教職1回生と合同）**	体験発表を通じて授業力を養うとともに、後輩のモチベーションを高める。	・代表5名（発表15分、質疑応答5分） ・発表用資料 ・評価・記録用紙 作者（　スーラ　）ファ(　5　)
5	11/10 月	**新しい鑑賞授業の在り方2**	実物の作品を用いた対話による鑑賞法について学ぶ。	・実物を用いた例 作者（　6　）ファ(　7　) 作者（　8　）ファ(　9　)
6	11/17 月	**新しい鑑賞授業の在り方3**	ティーチャーズキットを用いた対話による鑑賞法を学ぶ。	・ティーチャーズキットを用いた例 ティ①（小学校低）ファ(　10　)
8	12/1 月	**模擬授業** **（対話による鑑賞）**	「対話による鑑賞」について、ファシリテーター役と鑑賞役の両方の立場を体験しながら学ぶ。	ティ①（小学校低）ファ(　11　) ティ②（小学校高）ファ(　12　) ティ③（中学校　）ファ(　13　)
剣	12/6 土 3･4限	**体験発表会（介護）** **鑑賞模擬授業** **（教職1回生と合同）**	教育実習で学んできたことを後輩たちに伝えるとともに、新しい鑑賞の授業を体験する。	作者(　14　) ファ(　15　) ティ③(中学校) ファ(　16　)
9	12/8 月	**交流模擬授業** **（対話による鑑賞）**	自作品を持って小中学校へ出向き、「対話型鑑賞」による授業を想定した模擬授業を展開することによって、実践力を身に付ける。	作者（　17　）ファ(　18　) 作者（　19　）ファ(　20　) 作者（　21　）ファ(　21　)
10	12/15 月			ティ①（小学校低）ファ(　22　) ティ②（小学校高）ファ(　23　)
11	1/19 月			作者（　24　）ファ(　25　) 作者（　26　）ファ(　27　)
打合せ	**1/24** **土** 14:30	**交流授業** **（対話による鑑賞）** **事前打ち合わせ**	参加者による合同での事前準備を行う。**模擬授業、ファシリテーターと作者のペアリング等。**	参加者（予定） **専攻科1･2回生等　約10名** **学部生1･2回生　約10名**
12	1/26 月			ティ③（中学校　）ファ(　28　) ティ①（小学校低）ファ(　29　)
13	1/31 土			作者（　30　）ファ(　31　) 作者（　32　）ファ(　33　) 作者（　34　）ファ(　35　)
14	2/2 月			ティ②（小学校高）ファ(　36　) ティ③（中学校　）ファ(　37　)
任意	**2/6** **金** 5･6限	**交流授業** **（対話による鑑賞）**	大淀桜ヶ丘小学校 **模擬授業で培った力を、実際の授業実践によって、さらに深める。**	参加者 専攻科2回生　（４）名 専攻科1回生　（３）名 教職2回生　（７）名 教職1回生　（５）名 卒業生　（１）名

a　第1回目　11/1(土)「新しい鑑賞授業の在り方１」

教職２回生の中学校や高等学校での鑑賞授業の経験は、NHKの日曜美術館のビデオや作家紹介のDVDによるもの、教科書の図版、生徒同士の作品の鑑賞などが主で、定期考査への出題のために行われている場合も多く、「対話による鑑賞授業」の経験はほとんどないのが現状であった。そこで私の方から、これまで行われてきた鑑賞の仕方やあまり広まらない理由などを考えさせた。そして、宮本三郎の『妻と私と』（右図）を題材にして実際に私がファシリテーター役を務めながら「対話による鑑賞」を行って見せた。図版は、図書館の画集からA3に拡大コピーして台紙に貼ったもので、２人に１枚配布した。

まず鑑賞する際の「５つの約束」を説明した後、1分間作品をよく見て感じたことを箇条書きするように伝える。発言させた内容を順に板書しながら、徐々に深めていった。　そして最後に、作者の死後、作者の妻が生前の夫について語った文章を紹介し終わった。みんな、大凡の流れは理解したようだ。

b　第２回目　11/8(土)「鑑賞模擬授業（教職1回生と合同)」

教育実習の体験を教職１回生に発表する集中講義の中で、教職２回生の学生が、教職１・２回生を対象に「対話による鑑賞授業」を実施した。

鑑賞には、スーラの『日曜の午後』を画集からスキャナーし100cm×80cmにプリントしたものを用いた。これは実際に教育実習先の研究授業で使われたもので、本学のデザインコースのプリンターで実費で作成してもらったそうだ。

ここで取り上げたのは、教職１回生に「対話による鑑賞授業」を体験させることが主な目的であるが、教職２回生にとっては２月の訪問授業の練習も兼ねている。25分間の鑑賞では、時代背景や点描などの描写に関する意見や感想などが出され鑑賞が深まっていったが、1･2回生合わせて30名の多数を対象に行ったため全員から発言を引き出すことが難しく、また発言者が偏る様子も見られた。ファシリテーターの経験不足も否めないが、鑑賞を深めるためには10人位までが限界のようである。次回の集中では、２班に分けて進めることにした。

c　第３回目　11/10(月)「新しい鑑賞授業の在り方２」

今回は、浜口陽三の『壺ととうがらし』の図版を３つのグループ毎に配布し、約25分間の予定で行う。ファシリテーターが発言を逐一板書していったので、間が空いてしまった。発言の深め方や取り上げ方に戸惑いが見られたので、私が何度かアシストしたが、15分も経つと発言が出なくなったので終了することした。

次に、実物作品の鑑賞ということで、私のテラコッタ作品『前へ』を使って鑑賞が進められた。

彫刻作品の鑑賞では、四方から見ることが可能な展示方法を工夫する必要があるが、実際に触れたり、持ち上げて重さを確認したりできることが実物のよさである。

鑑賞は、教卓に置かれた作品を全員が立ったままのスタイルで進んでいった。まず驚いたのは、鑑賞が進むにつれ作者の制作手順や進め方をなぞるような発言がたくさん出てきたことである。鑑賞中

に、作者に対する質問が幾つか出たので、最後に私の方から制作過程や作品への思いなどを話すことになった。最後まで立ったままだったので、発言をまとめたり深めたりすることが難しかったようである。

見る場面と考える場面をしっかりと分け、自分の考えや人の発言を整理する時間が必要であることが分かった。事後の感想から、進め方についての不安の声が聞かれたので、前年度用いた上野行一氏の**「対話による鑑賞教育」（中学校美術教師のためのガイドブック）Vol.2の第３章授業のポイント**を、次回から取り上げることにした。

d　第４回目　11/17（月）「新しい鑑賞授業の在り方３」

最初に、**第３章授業の「発言に対する心構え」ポイント１**から、①発言を引き出す上手な聞き方「うなずき」「ミラーリング」「繰り返し」、②意見をほめる、③小まとめ、について説明した。

次に、デザインコースの学生の作品を用いた鑑賞を行った。この作品は、音楽の歌詞からイメージして制作されたことが最後の作者の解説によって分かった。作品の色や形から、連想が広がり様々な発言が出て深まっていった。

ファシリテーターが黒板に発言を板書する形で進んだが、短いフレーズで書き留めたり、キーワードを丸で囲んで他の項目と矢印で関連付けたり、また同種類の内容を色分けして分かり易く表示したりするなど、うまい黒板の使い方が鑑賞の手助けになっていた。鑑賞時間は約25分であった。

続いて、プロジェクターを用いた例として、ティチャーズキット①小学校（３・４年）用の中から、クラレンス・H．ホワイト『朝』（右写真）を取り上げ、私の方で進めながら鑑賞した。これは100年以上も前に撮影された写真作品で、モノクロであるが水墨画のような淡いモノトーンがかえって新鮮に感じる作品で或る。登場人物の女性や背景、画面を分断している樹などに発言があった。ここでは、板書せずに口頭でまとめながらファシリテートする方法を行った。本番の出前授業では、学生の作品を前に板書なしで行わなければならないので、その練習でもあるが、板書との違い、利点、困難点などを解説した。次回からは、いずれの方法でもよいことにした。

e　第５回目　12/1(土）鑑賞模擬授業（対話による鑑賞）１

まず、**「発言に対する心構え」ポイント２**から、三つの原理　〈受容〉発言を受容すること、〈交流〉発言から対話を組織化すること、〈統合〉発言の恒常的変容小を促すこと、について解説した。

今回は、ティチャーズキットの①～③を、三人が各２枚ずつスクリーンに投影する方法で鑑賞を進めた。

一人目の一枚目は、オスカー・ココシュカ『眠る女』（次頁写真左）で、少女の背景に描き込まれた魚と鳥と鹿に話題が進み、動と静を読み取ったが、魚では水の波紋からそれを導いたところが興味深かった。

二枚目のパブロ・ピカソ『花売り』（写真右）では、灼熱の草原で化粧をした少女についてや不思議な四角形で青い光が広がる太陽などについて、読み取りが進んだ。二枚合わせて約25分間の鑑賞であった。

二人目の一枚目は、国吉康雄『カーテンを引く子ども』（写真左下）で、小さな女の子が親に頼まれて、窓辺のカーテンを開けようとしているのではないか、腰の紐には鈴が付いて迷子にならないようにしているのでは等、ユニークな視点での発言が聞かれた。

二枚目の横尾忠則『赤い襲撃』（写真右下）では、サラリーマンが生き残りをかけて世間を渡っている姿で、今真に成功を収めようしている真ん中の人、それと対峙するように栄光や勝利から見放された横たわる人、どちらともいえない右端の人という見方ができる。写真上には、鑑賞のテンションが上がり、ファシリテーターに発言場所を示そうとスクリーンの前まで出てくれた学生が写っている。

三人目の一枚目は、森村泰昌『ポートレイト（FUTAGO)』（写真左下）で、同じようなポーズの作品を見たことがあるが、それは女の人が描かれていたので、これはパロディなのではないか、着物や黒色の招き猫など日本のものがたくさん見られるなどの発言が出たが、横たわる男性が、名画の人物に扮装して写真にする作家の森村さん自身であるというところまでは至らなかった。

二枚目のカジミール・マレーヴィチ『乾草作り』（写真右下）では、ナイフのような光った物を持っているという発言から始まり、服やマスクにまで同様の表現が使われていること、光の方向が反対の場所もある不思議さについてなど広がっていった。また、２人の男以外は小さな人も含めて女性のように見えること、みんなはどんな仕事をしているのだろうかと謎が深まった。

ｆ　第６回目　12/6土　模擬授業（教職1回生と合同）

２回生の介護等体験３人の発表と３班に分かれた１・２回生の交流会の後、２タイプの「対話による鑑賞」を実施した。

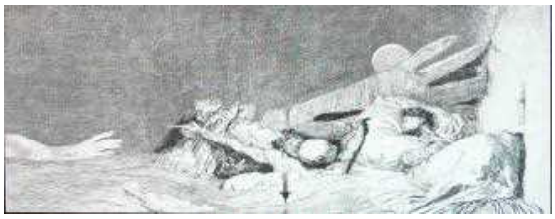
前半は、日本画「雨」50号の学生作品を囲んでの鑑賞である（写真右)。雨筋が画面全体を縦断している。近くの久米寺の風景であるが、本人は合評会であまり良い評価をもらえなかったらしい。描いた時の気持ちを語ってくれた。

後半は、ティチャーズキット③（中学校）から、古賀春江『海』（写真右２段目）とマックス・クリンガー『不安（手袋)』（写真右３段目）を、合わせて25分間鑑賞した。

今回はいずれも板書せず指示棒だけを使って行われたが、出た発言を忘れないように区切りの良いところでまとめながら進められていた。この様子を見ていると、板書をしない方が集中できテンポよく進むように思えた。しかし、経験を重ねた成果でもあり、最初からこうはいうわけにはいかないだろう。

古賀春江の『海』は、昨年度も取り上げられたものだが、海の中の潜水艦や工場の中が見えるようにカットされていることに話題が盛り上がり、科学技術の進歩や開拓精神が自由の女神と同じポーズをした水着姿の人物などに注目が集まったが、今回は背景の船や灯台に関心が集まるなど、鑑賞者によって随分視点が違うことを改めて感じた。

マックス・クリンガー『不安（手袋)』（写真右4段目）は、不気味な手のようなものがたくさん描かれたものだが、最後まで何を描こうとしたのかがはっきりとしなかった絵である。ティチャーズキットには、『トークの後にこんな話をしてみませんか、かなりクレージーでしょう』と書かれている。最後にファシリテーターから、「通りで手袋を落とした女性に一目ぼれした男が、恋こがれて、夜な夜な悪夢にうなされているという絵です。」とあった。ぐっと絵に惹き付けられる。時にはこんなエピソードを紹介するのもよいかもしれない。



g　第７回目　12/8月 鑑賞模擬授業（対話による鑑賞）２

まず、**「発言に対する心構え」ポイント３・５**から、対話の組織化「ひろげる、ふかめる、まとめる」と発言の分類の仕方「見たこと、感じたこと、考えたこと」を解説した後、実際の作品を持ち寄っての鑑賞を３つ行った。

一番目は、陶芸の作品である。（写真右）実物作品の鑑賞のよいところは、実際に手に触れることができる点である。触覚が加わることで、受け取る情報も倍増する。今回の鑑賞場面でも、器の厚みを確かめたり、肉付けされた模様の凹凸をなぞったりする姿が見られ、それによって発言に広がりが生まれた。最後の作者の解説から、植物にも生き物にも見える肉付けされた模様は、クラゲの触覚からヒントを得て造形したことが分かったが、鑑賞者の発言と重なる部分が多くあり作品を読み取る力が向上してきたのが分かる。

二番目も陶芸作品であった。白い不定形の二つの塊が柔らかく漂っている。一つは真ん中に空洞を作り、もう一つは歩いているようである。所々に青色の釉薬が吹き付けられており、肌合いの表現や技法などに話題が集まった。作者からは、雲をイメージしたもので、四つの組作品の内二つを持ってきたことが明かされた。

三番目は、染織のタペストリー作品である。桜のような大樹が大空に溶け込んでいく、遙か上空には黄色の鳥が一羽飛んでいる。長さ２m20ｃｍ、幅70ｃｍ、厚みが１ｃｍ程ある大作である。最初は、窓につるして全体が分かるようにし、次に机の上に広げて触れながら鑑賞した。作者以外は織物の経験が無く、その作成方法に興味津々であった。

特に、作品を裏返しにした時に歓声が起こった。複雑に絡み合いながら結ばれた色とりどりの縦と横の糸は、それぞれ別々に染められていると聞き、更に驚きの声が上がった。鑑賞が終わってからも、作者を取り巻いて質問する姿があった。これまで二年間、教職を目指す学習を共にしてきた仲間の新たな一面を発見したようである。

h　第８回目　12/15（月）鑑賞模擬授業（対話による鑑賞）３

まず、**「発言に対する心構え」ポイント４**から、対話の舵取り「ならべる、くらべる、立場をかえる、つなぐ、わける、ゆさぶり、もどす」について、解説した。ポイントの最後である。

続いて、一番目は、ティチャーズキット①小学校（３・４年）の中から、ワリシー・カンディンスキー『赤色の前の二人の騎手』（写真左下）である。なるべく、作者や題名を伏せるようにしているが、最初に目に付くのは背景の赤色である。白く抜かれたところは女の人の横顔にも見えるという発言があった。鑑賞が進むにつれ、馬にまたがる騎手と直ぐ近くの樹木がそれぞれ対になって表現されていて、前は老い、後ろは若さを表しているのではないかというところに辿り着いた。

２作品目は、ローズマリー・ラング『フライト・リサーチ＃９』（写真右下）である。空中から落ちてきているようだ、逆に下から浮遊しているのでは、瞬間異動で突然現れたのではと、そう言われればそう見えてくるから不思議な写真である。実際には起こりえないと感じている瞬間を表したものだからだろうか、想像が広がる。最後にファシリテーターが、この写真家は花嫁衣装を着た女の人が色々なポーズで飛び降りている写真を撮影していると明かして終わった。

２番目は、②小学校（５・６年）の中からフリオ・カルテリャノス『誘拐の天使』（写真左下）が写された。壁を隔てた左と右の天使の様子や、左のベッドに入る日の光について発言が及んだ。

二枚目のエドヴァルト・ムンク『生命のダンス』（写真右下）では、右の黒い服の女性と左の白い服の女性は同一人物で、真ん中のカップルを巡った心理を表しているのではないかとの発言から始まった。ファシリテーターは、一連の**「発言に対する心構え」**から学んだポイントを踏まえながら、板書を使わなくても鑑賞者の発言を的確にまとめたり広げたりすることができるようになっ

てきた。

ｉ　第９回目　1/19（月）　模擬授業（対話による鑑賞）４

今回は、専攻科２回生の４名が訪問授業の練習のために参加することになった。この学生達は、２年前に教員免許を取得しており、「対話による鑑賞」の講義も受けているが、実践経験が無いため練習を申し出た。

最初は教職２回生が、ティチャーズキット③（中学校）より、マルク・シャガール『町の上で、ヴィテブスク』をファシリテートした。プロジェクターを使った鑑賞なので、板書をせずに進める手法を用いた。ファシリテーター役も慣れてきたようで、要所要所で発言をまとめたり、鑑賞のポイントを押さえたりする手法も板についてきた。最初のじっくり見る場面を、時間の都合で短くしたので、12分間の鑑賞で発言をしなかった者が２名いた。そんな場合は、指名や発言しやすい問いを考える等のアドバイスをして鑑賞を終えた。

２番目は、ＯＢの番である。久し振りの教壇なので、少し緊張しているようだ。しかし、暫くすると勘を取り戻したようで、鑑賞者の発言を上手く汲み出せるようになってきた。作品は、ロバート・ウィルソン『記憶／喪失』である。少し不気味なシチュエーションの作品で、最初は怖い等の暗い発言が多かったが、鑑賞が進むにつれ様々な角度からの発見があった。最後の方で、作品の手法や材質についての問いが出て終わった。

３番目はティチャーズキット①小学校（３・４年）の中から、ジョバンニ・フランチェスコ・カロート『少年の肖像』である。

作品の題名を告げていないので、一人を除いて大半の鑑賞者が女性を描かれていると思ったようで、髪型や服装などから判断するという既成観念が働いていると感じた場面であった。しかし、手にした落書きのような決して上手くない人物の絵や、それを持つ手の大きさなどに話題が広がり、鑑賞が進むにつれて男性ではないかという数も徐々に増えてきた。鑑賞の深まりや、他者との意見交流によって判断に変化が生まれたと考えられる。

４番目は、ＯＢで①の中からワリシー・カンディンスキー『赤色の前の二人の騎手』が選ばれた。これは、一ケ月前にも取り上げられているが本人だけが知らない。見ていて、以前よりも早く鑑賞が深まっていったように感じた。暑さを表現する手法や馬上の人物の仕草など、興味深いのは以前の発言をしっかりと覚えていることと、新しい鑑賞者が加わったり、ファシリテーターが変わったりすることによって、同じ作品でも広がり方が違ってくるということである。対話による鑑賞は、参加者によって共同で作られていくものであるということを改めて感じることになった。

５番目は、②小学校（５・６年）より、マーク・タンジー『ド・マンを問いただすデリダ』である。題名を知らないので、危険

な場所でダンスをしているように見えたようで、どうしてもその発言から抜け出せなくなってしまった。プロジェクターでは見えにくいが、パソコンのモニターでは、岩のような表面に、びっしりと文字が書き込まれていることを知らせると、全員が我先にとのぞき込みに来たのが印象的であった。

最後は、同じく②の中から、斎藤信一『さすらいの楽士』が選ばれた。実は、この絵は昨年にも選ばれており、全部で90作品あることから考えると選考される確率が非常に高い。学生達の好みの傾向が感じられ興味深い。全員にこの冊子から好みの作品を選ばせてみると、何らかの傾向が出てくるかもしれない。

ここでは、ファシリテーターが鑑賞の最後に題名を述べ、描かれた人物が楽士であることを明かして終わった。

４人のＯＢを交えての鑑賞会であったが、お互いによい刺激を受けたようである。

j　第10回目　1/26（月）　模擬授業（対話による鑑賞）５

今回は、３つの作品を持ち込んでの鑑賞である。まずは、陶芸作品で、赤土で紐作りをして成形した後、白化粧土をかけて模様を掘り出し、透明釉を掛けて焼成している。オブジェの様相が強い花器である。上部に模様に合わせて口が切られている。鑑賞者からは、大きな大福のようでおいしそうだという感想が出たが、発言が続かない。鑑賞者の多くは陶芸経験がないので、何を言ったらいいかわからないようだ。そこで、疑問を作者に直接答えてもらうことにすると、少し専門的な内容の質問と返答が続いた。小学校で実施する際も、同様のことが予想されるのでそれへの対応の仕方を考える良い機会になった。やってみなければわからないものである。

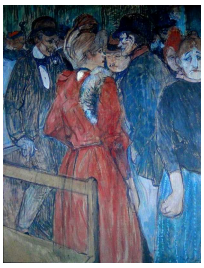
次は、クラフトコースの作品で銀製のブレスレットとイヤリングである。作品が小さいので、みんな集まって目を凝らして見ることになる。思わず触りそうになって作者の様子を窺う。許可が出ると、ひっくり返したり実際に手に付けたりと鑑賞が活発になった。視覚だけでなく、触覚も加わることで情報が倍増するのである。

小さな蟻が一列になって、飴玉に向かう。一匹だけが反対向きに進んでいる。見ているうちに、様々な物語が浮かんでくる。同じ蟻がモチーフなのに、どうもブレスレットとイヤリングの雰囲気が違うことに気が付いた。後に作者から、教育実習前と後に制作したことが明かされ、微妙な違いを自分たちが感じ取れたことへの満足感をがあった。作者から、銀ろう付けやたたき出しの技法などについての解説があり終わった。

最後は、デザインコースの作品で、本の表紙をCGで描いたものである。火曜サスペンスのようという発言を皮切に、少しミステリアスな推理が続く。どうも、右上に飛び散った真っ赤な血のような形と色の印象が強く、どうしても話題が殺人やミステリーの方に向いてしまう。冬の５限目の授業、１７時も過ぎ窓から見える景色も随分薄暗くなって

きた。帰りを心配して話題を変えるように促した。 最後の作者の解説では、男女の純愛、しかも結構ドロドロとした小説の内容を想定したということで、みんなの感想や予想とは少し違っていた。実際の本のサイズはもっと小さいことから、出力サイズの大きさにも原因があることが予想された。

k　第11回目　1/31（土）　模擬授業（対話による鑑賞）６



一人目は、染織コースの学生で、ティチャーズキット②小学校（５・６年）の中から、アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレックの『ムーラン・ド・ラ・ガレットにて』を選んだ。真ん中の赤い服を着た女性が、まず目に付く。次に肩に掛かる毛皮のマフラー、男性の内二人が顔にピエロのような化粧をしていること、そして背もたれや背景に少し見える水色から船を連想する。面白かったのは、真ん中に少し見える小太りの男性と両隣の三人が賭け事をしているように見えるというのである。そう言われれば、女性のマフラーの一部が男性がトランプを広げて手に持っているようにも見えてくるから不思議である。人の発言によって見え方まで変わるという例である。

続いて、フィンセント・バン・ゴッホの『ヴィゲラ運河にかかるグレーズ橋』が写し出された。ここ暫くメモや板書を使わず鑑賞を進めてきたが、今回は小さなメモ用紙を鑑賞者に配布し、最初の１分間の鑑賞時に感じたことを簡単に記入してもらい、ファシリテーターはそれを見ながら進行する方法が取られた。発言が行き詰まった際にと準備してきたようである。ファシリテーターの様子から、ほとんどの人が川で洗濯する女性達のことを書いていたようで、続いて橋の上の人物、そして背景の工場の煙突の煙というように、中央から奥に向かって視線が移動していることが分かる。発言の手掛かりがつかめる一つの方法だと考えられるが、書かれた事項にこだわってしまう傾向も見られたので、使い方次第だとも感じた。

二人目は、デザインコースの学生で、ティチャーズキット③（中学校）から森村泰昌の『ポートレイト（FUTAGO)』を選んだ。今年度２度目の鑑賞である。前回の時より、ポイントがはっきりしているように感じた。鑑賞者は、以前の鑑賞体験を踏まえ、発言のポイントを整理するとともに前回話題になった点を更に深めようとする意識が働いているように思われた。また、前回出なかった新たな箇所を見つけようという気持ちも起こっているように感じた。これまでは、できるだけ違うものを取り上げた方がよいのではないかと思うところもあったが、同作品を複数回鑑賞することの大切さも感じることになった。

次に選んだのは、エル・グレコの『受胎告知』である。題名を知らせないようにしているが、さすが芸大生である。左の女性に天使の輪が薄く描かれているのを見てマリア、そして右の天使の右腕のしぐさから何かを伝えているので受胎を告知しているところでは、とズバリ言い当てた。そして、雲や稲光のような光が見えるので屋外のようであるが、マ

リアの前には聖書と机、足元には籠の中に繕い物が見え、屋内のようでもある。さらに、稲光で家が吹き飛んだのではないかと突飛な発言が出て、みんな大笑いした。かと思うと、画面の右下の花瓶には枯れた花があり、右の天使の腕には生き生きとした百合の花があることから、荒廃した世界に繁栄や歓喜がもたらされることを暗示しているという鋭い洞察もあり鑑賞の深まりが早くなってきていると感じた。

ｌ　第12回目　2/2（月）　模擬授業（対話による鑑賞）７

いよいよ練習も最後を迎えた。今回は作品持ち寄りの鑑賞である。一人目は、画面中央に二本の新芽が出ている切り株が描かれている50号の日本画である。全体に黄土色で統一され、地面に落ちる枯葉やかすかに茂る雑草が細かく描き込まれている。鑑賞者からは、描かれた季節や、空気感を感じさせる描写方法などについての発言があり、最後に作者から場所や心境についての解説が行われた。

続いて、飛び入りで参加した洋画の専攻科生がファシリテーターを、また作者が不在のため代役を務めるなど、いつもと違った雰囲気で始まった。ファシリテーターは、２年前にこの鑑賞方法の授業を受けており、一人目の学生の進め方を参考に落ち着いた様子で進めていった。節目節目で発言をうまくまとめたり、鑑賞のポイントを明確にしたりするなど、教職学生たちにも良い刺激になった。

最後は、80号の日本画の鑑賞である。大きな枝分かれした木が描かれており、木の下の方には新芽がたくさん出て上の方にはツタが這っている。鑑賞者からは、手の５本の指のように見えるという発言があり、実は作者も描いているうちにそれに気づき意識したと明かした。他にも、背景の重ね塗りの効果や技法について発言があり、芸大生ならではの専門的な話題が交わされた。

ウ　大淀桜ヶ丘小学校の先生と参加学生との事前打ち合わせ　1/24（土）　本学1-2-7　14:30

打ち合わせは、学生が参加予定者20名（H23年度生4名、H24生3名、H25生7名、H26生5名、卒業生1名）の内16名、吉野小学校の河原教諭（吉野図工美術研究会代表）、教務課の堀田、私の19名で行った。まず私の方から、今回の学校訪問授業の目的として、①各自の授業実践力、②学年を超えた教職履修学生の共同作業によるネットワークづくり、③小中学校との連携交流、及び「対話による鑑賞」の普及の３つであることを伝えた。

続いて、当日のタイムスケジュールと役割分担（表１）について説明をしながら、班別の組み合わせの際に、簡単な自己紹介を行った。（写真右）ムサビとの共同授業に参加した学生もおり、その時の様子を話してくれたり、小学生への授業に不安を感じたりしている声も聞くことができた。

そして、次のような大きな流れについて確認をした。

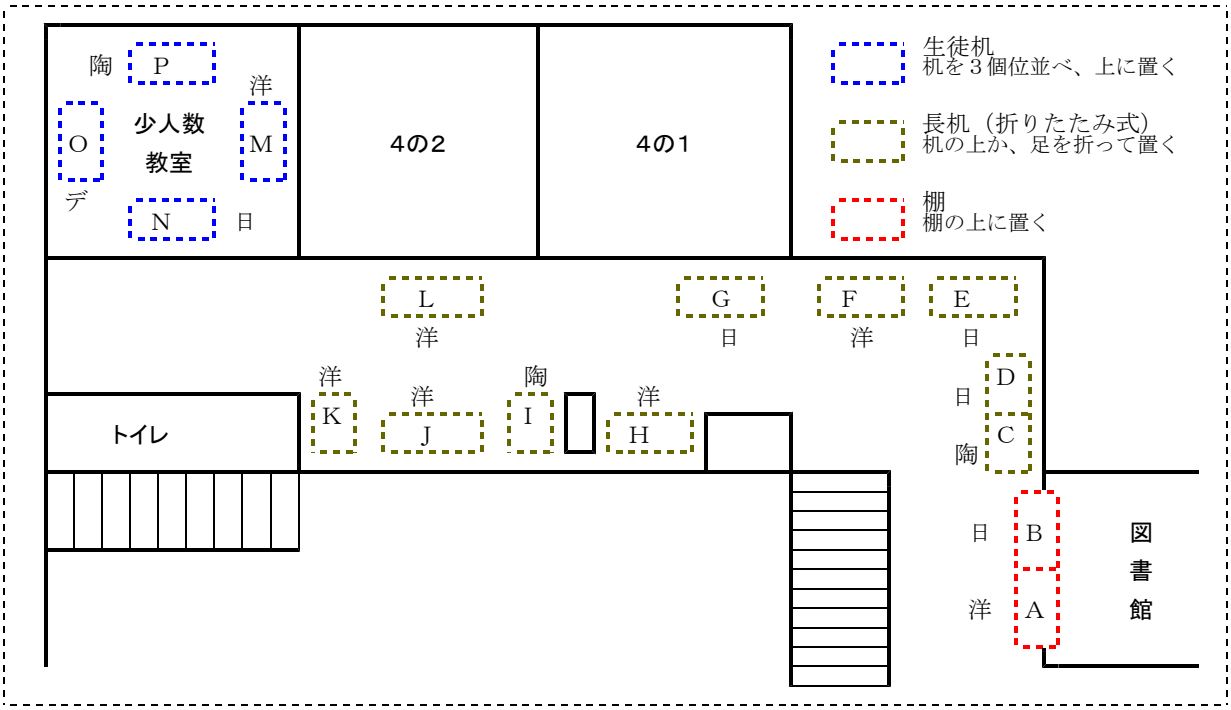
① 学校に着いてから作品を受け取り、控室で簡単な打ち合わせの後作品の設置。（図１）
② 昼食後、展示場所に来る児童の相手。名札づくりで児童と最初の交流。
③ ４の１の教室で、橋本教諭の進行の元、五時間目の授業開始。
④ 鑑賞時の５つのルールの説明後、児童６人ずつ８つの班に分かれて作品へ移動。
⑤ １回18分程で、ファシリテーターの進行で、作者は適宜質問に応答。
⑥ ２回目は、役割を入れ替わり次の作品に移動。続いて20分の自由鑑賞。
⑦ ６時間目は教室に集まり、児童による班別鑑賞のグループ発表、自由鑑賞での個人発表。
⑧ 吉野郡図画工作研究会の教員とグループに分かれて研究協議。
⑨ 作品を車に運んで終了。

スケジュールを確認した後、卒業後参加した一人に練習がてらファシリテーター役で模擬授業を行ってもらった。作品は、30号の油絵で人物を中心に背景にギターやテーブル、布などのモチーフが置かれており、課題で制作したものと思われる。学生の場合、卒業制作では自分でテーマを設定することもあるが、大抵は学習課題として出題されたものが多く、制作意図や動機について質問されたときに、どうしてもそのことが出てくる。これらのタイプの作品を今回のような訪問授業で鑑賞するときは、その点を踏まえて作者が答える必要があると感じた。児童にとっては、それが課題として課せられて制作したかどうかよりも、どういう気持ちで、そしてどうやってそれを制作したかを知りたいからである。

もう一人、ファシリテーターの練習をしてもらったのは、昨年ムサビとの共同授業にも参加した学生である。久し振りの人前でのファシリテートに口ごもる場面が見られた。普段、一人で黙々

○ 展示場所・方法

図１



と絵を描くことに没頭しているため、なかなかモードの切り替えが難しいようである。鑑賞作品は20号の風景の油絵で、これも課題制作の作品だったので作者から前のような言葉が出てきたのでやはり違和感をもった。純粋な創作意図をもって制作された作品を、鑑賞対象にする方が良いようである。

○ タイムスケジュール・担当　　表１

時間	場所	内容等
11：30	橿原神宮前駅 発	下市口駅 着（12：01）
12：10	大淀桜ヶ丘小学校 着	軽トラから自分の作品を受け取り、二階の控え室へ
20	**控え室（多目的室）**	挨拶、打ち合わせ　（代表：B）
25	**多目的スペース**	作品展示
40	**控え室（多目的室）**	昼食
13：00	**多目的スペース**	**児童との交流**（昼休みの自由鑑賞の対応）
30	**4の1 教室**	**学生紹介、名札作り**（８班編成）

班	1	2	3	4	5	6	7	8
担当者	A B	D C	F E	H G S	J I T	Q K L	R M N	P O

時間	場所	内容等
50	**4の1 教室**	**（5限開始）** 橋本教諭進行（ルールの説明）
14：00	**多目的スペース**	**1回目の作品鑑賞**（８班編成）

班	1	2	3	4	5	6	7	8
ﾌｧ	B	D	F	H	J	Q	N	P
作	A	C	E	G	I	K	M	O

時間	場所	内容等
20	**多目的スペース**	**2回目の作品鑑賞**（８班編成）

班	1	2	3	4	5	6	7	8
ﾌｧ	A	C	E	G	I	Q	R	O
作	B	D	F	H	J	L	N	P

時間	場所	内容等
40	**多目的スペース**	休憩、**自由鑑賞（各自作品の前で解説）**
45	〃	**（6限開始）**　〃
15：00	**4の1 教室**	**グループ発表、個人発表**（橋本教諭進行）心のスケッチ
25	〃	**まとめ**（児童・学生代表挨拶）（代表：Ｊ）
30		休憩
40	**4の1 教室**	**交流会**（吉野郡図工美術研究会　約13名）（代表：Ｅ）
16：30	**多目的スペース**	片付け（軽トラへ作品積み込み）
17：00		解散

(2)　大淀桜ヶ丘小学校での訪問授業〔 2015年2月6日 **（金）5･6限 〕**4年1･2組 44名

ア　作品展示と打ち合わせ

本校から近鉄電車で30分ほどのこの小学校は、７年前に改築された美しい校舎で、吉野の木材がふんだんに使われており、各教室の前には教室の幅ぐらいの広い廊下があって、多目的スペースとしても利用されている日当たりのよい場所が所々にある。各学年毎にイベントができるようになっているのである。今回も、４年生二クラスの前に至る通路と、特別教室を使って16点の作品を展示することになっている（図２）。場所によって光の当たり具合が違うので、作品の大きさや種類に合

わせて、机を畳んでその上に置いたり、向きを調整したりしていった。

その後、控え室の多目的室に集まり、昼食を摂りながらの打ち合わせである。本日の流れや８つの班員を確認するとともに、実際の授業では時間通りに行かなかったり内容の変更が行われたりすることが多々あることを伝えた。学生達は、教室の適所に集まり、班ごとに簡単な打ち合わせを始めだした（写真右）。いよいよ他学年、他コースとの最初の交流である。今日初めて顔を合わせた班もあるようで、少し緊張気味である。

イ　昼休みの児童との交流

学校は、１時から30分間が昼の休憩時間である。昼食後、展示場所に来る児童の相手をし、作品の安全を守りながら児童の様子を窺う。子どもたちは、廊下のあちこちに展示されている普段とは違う景色に興奮気味である。興味津々の子どもたちが、作品におそるおそる近づいてくる。（写真右）作品について質問があっても、この後の授業を楽しみにするように答えることにしてあった。

ウ　名札づくりで交流

1時30分からの15分間（平常は清掃の時間）を名札作りに当てた。鑑賞時に、児童と学生の名前が互いに分かるようにするためである。（写真右）教室の床に敷かれたクッションマットに、８班に分かれた児童と学生が集まった。橋本教諭が画用紙と安全ピンを準備してくれたので、油性の色マジックを使って名前やイラストなどを書く。学生達は、児童と会話を交わしながら次の鑑賞に備えているようだ。

エ　鑑賞授業開始（5限）

４の１の教室で、橋本教諭の進行により鑑賞授業が始まった。『作品のよさや美しさ面白さを味わおう』と書かれた黒板に、鑑賞時の５つのルールを書かれた紙を一つずつ説明しながら貼り付けていく。（写真左）。この教室の前や後ろには、橋本教諭のアイデアや工夫がたくさん見られる。例えば、発言の時の注意は『声のものさし（写真右）』を指さして、「今日はどのくらいの大きさで発言したらいいと思いますか。グループで会話するので、あまり大きな声では隣の班の人たちに迷惑になるので２のオレンジ位かな。」など、児童がイメージしやすいように具体的な例で指示されている。

オ　各班に分かれて移動、1回目のグループ鑑賞

学生の自己紹介後（右写真）、８つの班に分かれて作品の展示場所へ移動した。一つの班は、５～６人の程良い人数である。タイムキーパーの合図で、１回目の鑑賞が始まった。各ファシリテーターが、最初に５つのルールを確認してから作品をじっくり見ようと子どもたちに語りかける。どの班もスムーズに進行しているようであ

る。子どもたちは、できるだけ作品の近くに寄って真剣に見つめる。陶芸作品の前の子どもたちは、触りたい衝動に駆られているのがよく分かる。

ファシリテーターが、順に感想を聞いていく。一通り聞き終わると、それぞれの発言を深めていった。班によって子どもたちの反応が違う。発言したくてうずうずしている子どもが二人ほどいると、黙っていても活発な意見が飛び交う。ファシリテーターは子どもの発言を取り上げるのに精一杯になる。逆に、内気な性格の子が多い班は、発言を引き出すうまいテクニックが必要になる。いずれにしても即時の対応力が求められる。10分位発言を引き出した後、いよいよ作者の登場である。子どもたちは、期待に胸を弾ませている。子どもたちの考えがピタリと合っていると、うれしそうに話す作者もいれば、全く予想外の解説に子どもたちの驚く姿もあった。学生たちは、後の感想文にそのことをたくさん書いている。

１回目の鑑賞は、約18分間であった。

カ　2回目のグループ鑑賞

２回目は、ファシリテーターと作者の役割を入れ替わり次の作品に移動する。下の写真は、子どもたちの動きを連続で追ったものである。ある児童が作品を指さししながら発言し、ファシリテーターがそれを取り上げると、みんなが作品に近寄って確認する。そして、また別の児童が新しく思ったり感じたりしたことを発言する。そのようにして言葉と身振りによるキャッチボールが繰り返され、鑑賞が深まっていく様子がよく分かる。作品には、発言を引き出しやすいものと、そうでないものがあるようで、その場合はファシリテーターの力量が問われることになる。

次の写真は、実は未完成の日本画の鑑賞風景である。他の制作に追われて完成できなかったのである。困っている作者と相談して、急遽作品の前に岩絵の具と膠などの描画材を置くことにした。未完成なのを利用して、描く手順や描画材の解説をする展示に変更したのであるが、案外この鑑賞方法が良かったようで、子どもたちは初めて見る日本画の絵の具に興味津々で、後の発表場面では

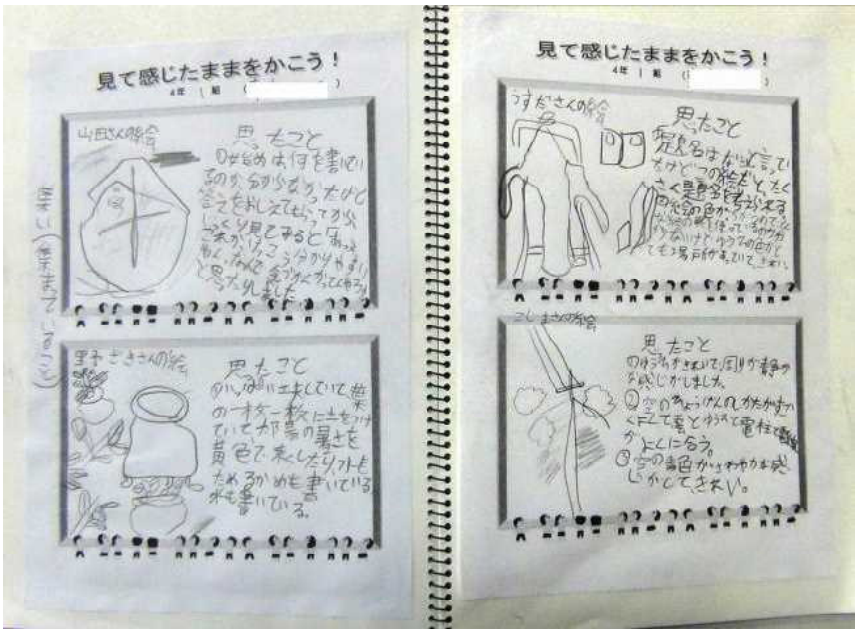
顔を高揚させながら得意そうに描画材とその使い方を話す児童の姿を見ることができた。また、絵に登場するウサギが緑色で描かれており、作者が実際の色にこだわらず自分の好きな色で表現しようとしたことを聞いて、子どもたちは絵の自由さを再認識したようである。学生の感想文にも、自分の表現への考え方に自信をもつことができて嬉しかったと書いてあった。このような、作者を交えて制作過程を紹介する鑑賞の仕方も効果的であることが分かったことも今回の大きな収穫である。作者も、自信の作品を鑑賞されることで創作意欲が高まる好例である。

右の写真は、２回目の参加の洋画作品である。表現方法が、具象から抽象に変化している。実は、昨年度ムサビが持ち寄った作品の多くは抽象表現であった。本学の学生達は、基礎基本を大切にする大学の方針から、具象的な表現の傾向が強い。作者は武蔵美の学生たちの作品に少なからず影響を受けたようで、スタイルが少しずつ変化していき抽象表現へと辿り着いた。また今回、抽象具象にかかわらず子どもたちはストレートに感じたままを口にしていることに驚くとともに、自身の表現方法に自信が持てたと後の感想文に書いている。

キ　自由鑑賞

続いて、20分間の自由鑑賞である。一端教室に戻った児童達に、橋本教諭が鑑賞方法を説明される。（写真右）

クロッキー帳に「見て感じたままをかこう！」と書かれた４つの枠がある。これを持って、気に入った作品について絵や文を書き込むのである。題名は、作品への先入観を持たないように明かしていないので、その欄には自分の考えたものを書くことになる。



全16作品の内、グループでは２点しか鑑賞していないので、１つでも多くの作品を見ようと大急ぎで廻る児童達、既にこれと決めていたのか長時間作品の前に座ってじっくりと取り組む児童もいる。どの子どもたちも、このような方法に慣れているようで、普段から取り組まれていることが分かった。

ク　自由鑑賞の班別交流と個人発表（6限）

子どもたちは、メモを取り終わるとなごり惜しそうに教室へ戻ってきた。班ごとに自分の鑑賞してきた作品についての感想を交流する。全作品を掲載した写真一覧を１枚ずつ配布し、どの作品かを示しやすいようにした。次の写真は、作品一覧を見ながら、思ったことや感じたことを班で話し合っているところである。

前回のムサビとのコラボでは、体育館だったので自由鑑賞で終わったが、今回は橋本教諭の発案で児童達の話し合いや発表を取り入れることになった。普段の授業でも、そのような活動を大切にしておられるとのことで、実際にこの後の個人発表では終了することが難しい程活発な発表が続いた。ベテラン教員の手腕が随所で発揮され、子どもたちの発言が止まらない。驚いたのは、将来画家になりたいという子が複数人いたことである。それも、その理由やどんな画家になりたいのかを非常に明確な言葉で表現するのである。橋本教諭は国語が専門で、普段の取り組みの成果であろう。また、学生達の事後の感想にもたくさん出てくるが、「絵は自由に描いていいんだ」と言うことに気づいたという発言が多く出たことである。そんな子どもたちの様子に、参加した学生は言うまでもなく、研究会の先生方も驚きながら参観されていた。

半日にわたる鑑賞授業もいよいよ終わりである。参加した20人の学生達は、充実したにこやかな表情で児童たちのお礼の言葉を聞いた。ここでも驚いたのは、橋本教諭の「お礼を言いたい人」との問いかけに、ほとんどの児童が一斉に手を上げ、一人ひとりが自分の思いをしっかりと言葉にしてお礼を言う姿である。元気な子どもたちに圧倒された一日であった。

ケ　吉野郡図画工作研究会の教員との交流会

交流が活発になるように２つのグループに分かれた。教員からは、今日の参加目的や普段の制作についての考えなどを児童達の反応を交えながら話された。中に奈良芸出身の方もおられ、懐かしそうにしながら後輩達を励ます言葉がけをされた。中学校では、今日の児童のような反応が返ってきにくいことなど、僅か30分であったが大変充実した交流となった。

最後に、指導された橋本教諭から、自身の小中学校での図工美術の思い出と、大学の指導教官の言葉で図工に目覚めたことなどが話され、丁度定年を迎えた最後の年、そして来年度の再任用が今日決まったことなど、またもや驚きの話での締めくくりとなった。

図画工作科 学習指導案

平成２７年２月６日（金）第５・６校時
４年1組24名　2組24名

１、　題材名　　『絵画の世界を見て見よう！作者と語ろう！』　　Ｂ鑑賞（１）

２、　題材について

日々の生活の中で、絵を見て鑑賞できる空間を作り、子どもたちが興味を持ち話し合う場を持ってほしいと考え、校内に複製画を掲示している。その前で子どもたちは、なんらかの話をしている場面をよく見る。校内作品展でも、友達の作品を見て「〇〇がうまく描けてる」「面白いな、工夫してるな」など、感じるままに話し、絵に興味を持ち自分も描いてみたいと意欲を示す子も多くいる。今回実物の絵を見て、感じるままに意見を述べ交流しあうことは、貴重な経験であると共に、一人ひとりの感性をうんと高めることができる。

図画工作の授業の中で、友達の作品を見て、良いところや感じたことを見つけたり、自分の作品について工夫したことを発表しあう取り組みを行ってきた。しかし、実物の絵画を間近で観て、自由に感想を述べ合い意見を交換する機会はなかった。さらに鑑賞活動を通して自己の感性を深めたり、友達の意見を聞いて他者の理解を深めたりする機会もなかった。今回の取り組みは、子どもたちにとって有意義であると考える。

児童の多くは、図画工作が好きで、図工の時間を楽しみにしている。日々自然物を描いたり、図鑑などの写真を模写したり、絵画に対する興味関心は広がってきつつある。今回の対話による鑑賞「自分の思いをみんなに伝えたい、自分の考えを聞いてもらいたいという願いを、カウンセリングに近い方法で、児童の発言を促し対話を進行させる」によって、鑑賞の楽しさやおもしろさを感じさせる大切な機会としたい。また奈良芸術短期大学の協力により、学生の作品を見つめ、自分の感性を働かせて感じたことを話し合うという言語活動を通して、児童の鑑賞能力を高めさせたい。

３、　題材の目標

・学生の作品を鑑賞する活動を通して、作品のよさや美しさおもしろさを感じとる。
（造形への関心・意欲・態度）

・感じたことや思ったことを話し合い、作者による表し方の違いや特徴、表現の意図などをとらえる。
（鑑賞の能力）

＜共通事項＞

ア　自分の感じ方を大切にして学生の作品を鑑賞し、形や色、動きや奥行きなどの造形的な特徴をとらえる。

イ　形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつ。

４、　学習計画　（全２時間）

第１次　授業のねらいを把握し、ファシリテーターと共にグループで鑑賞する・・・（１時間）
第２次　自分が関心ある作品を自由に鑑賞し、感じ取ったことをまとめる　　・・・（１時間）

５、　準備物

児童・・・・鑑賞ノート　　指導者・・・学生の作品

6、　題材の評価規準

・作品のよさや美しさ、面白さなどを自分の思いをもって感じとろうとしている。
（造形への関心・意欲・態度）

・友達や作者の意見を参考にしたり、文章に表したりしながら、形や色などの造形的な特徴をとらえ、学生の美術作品のよさや美しさ面白さを感じ取っている。（鑑賞の能力）

＊ファシリテーター・・・会議やミーティングなど複数の人が集う場において、議事進行に努める人のこと。中立な立場を守り、参加者の心の動きや状況を見ながら、プログラムを進行していく人。段取り・進行・プログラムを鑑みながら、問題の解決や合意の形成に導く役割をする人。

7、　本時案

（１）本時のめあて

絵画をみて、よさや美しさやおもしろさを、作者と話そう。

（２）本時案

学　習　の　活　動	指導上の留意点と評価（□指導☆評価）
作品のよさや美しさ、面白さを味わおう！	
１、本時の学習のめあてを理解する。（10分）	□絵は自分の感性のままに見ることを知らせ、鑑賞意欲を高めさせる。 □自分の感じたことを伝え、友達が感じたことをしっかり聞くことを知らせる。
２、ファシリテーターと共に、グループで作品鑑賞をする。 8グループに分かれる。（２０分×２）	□一人一人の児童が自分の思いがもてるように、十分な時間を確保する。 □自由な発言から、形や色などに注目させ、自分のイメージを持たせる工夫をする。 ☆友達や作者と話し合ったりしながら、作品のよさや美しさ、おもしろさなどを自分の思いをもって感じとろうとしているか、児童の様子から評価する。 （造形への関心・意欲・態度）
３、自由に作品を鑑賞し、関心をもった作品について、感じたことをノートにかく。（２０分）	□一人ひとりの児童が自分の思いを持てるように、作品を見つめる時間を十分に確保する。 □好きな絵画をめぐりながら、ノートに自分の感じたことをまとめさせる。 □自分が興味を持った作品のよさや美しさなど、自分なりに感じたことを話させるようにする。
４、感じ取ったことを語り合う。（20分）	☆形や色などの特徴をとらえ、作品のよさや美しさ、おもしろさを感じ取っているか、評価する。 （鑑賞の能力）

鑑賞作品一覧

 A「無題」 F50　油絵	 D「過ぎる」 465×375　日本画	 E「ホロホロ鳥」 F50　日本画	 G「つどい」 F50　日本画
 J「透過」 1167×803　油絵	 F「夢想恋歌」 610×910　油絵	 H「風に帰る」 1670×1343　油絵	 B「うさぎ」 F50　日本画
 N「暮れる」 F80　日本画	 O「堕ちる」 B3 デジタル作品	 P「漂う」 47×47×13.5 陶芸	 C「移りゆく」 15×28×34×2個 陶芸
 I「溢れる」 35×20×21　陶芸	 K「歴史ある道」 F30 油絵	 M「女の人」 F30　油絵	 L「peace」 P100　油絵

(3) 授業実践とネットワークづくりの成果と課題

ア 教職履修学生のネットワークづくり

本学では、全校生徒の約１～２割が教員免許状取得を目指し教職課程を履修しているが、各学年の教職履修生徒数は年度によって10人～20人なので、刺激が少なく高め合うことが難しい。他の学年との交流の機会は、教育実習や介護等体験を後輩達に聞かせる教職集中での２回と、学内での模擬授業と教育実習先での研究授業の学習指導案を蓄積し、USBに入れて教育実習時に参考にできるように持参させている程度である。

何とか異学年との縦のネットワークを図りたいと考えてきたが、今回の訪問授業が大変良い機会となった。違う学年の授業への飛び入り参加やグループ活動など、事前準備から何度か交流する場面がもてたことにより、専攻科２回生から４名、専攻科１回生から３名、教職２回生から７名、教職１回生から５名、卒業生から１名の計20名が参加してくれることになった。作品も16点集まり、洋画、日本画、デザイン、陶芸と４部門が揃うことになった。他にクラフトコースや染織コースがあるので、今後の出品が期待できる。本学には６つのコースがあり、多様な作品鑑賞ができる強みがある。

イ 参加した学生達の感想より

「訪問授業に参加して」というテーマで、一人約200字程度で感想を書いてもらった。次は各学年別の感想の一部であるが、事前未学習者や訪問未経験者、再経験者など、それぞれの経験の違いによる考え方や視点の相違が興味深く、特に再経験者の感想からは、事前に課題をもって臨んでいること、さらに事後は新しい課題をもったことが分かり、回を重ねる重要性を感じる。

教職1回生

○ 絵の中の男の子のポーズ（シェーのようなポーズ）をマネしてくれ、その無邪気な姿が、見ていてすごく嬉しかった。対話による鑑賞が始まると、子ども達は見えるもの、見えないものに想像力を巡らせて、どんどん面白い意見を出してくれた。一つの絵に対して、これだけたくさんの意見が出てくることに驚いた。子ども達が、「絵って自由なんだ」と感じてくれたことと、同じように、私自身も絵にはいろんな感じ方や表現があって本当に自由なんだと、忘れていた大切なことを思い出させてもらった気がする。

○ まだ教育実習に行っていない状態であったので、全然想像することができなかった。しかし、いざ行ってみると先輩方のサポートのおかげで、うまく小学生と話すことができ、良い経験になったと思う。小学生の素直な言葉に、自分自身が気づかされることがあったので、今後の参考にしていきたい。

○ 私は、頭の中で思っていても、口に出そうとするとうまく言葉にならなくて情けなかった。本当はもっとコミュニケーションを取りたかったけれど、行動に表せなくて後悔しました。その分、先輩達、小学生と先生達の会話や行動はとても良いお手本で勉強になりました。他のコースの作品も見ることができ、どんなことを思って作っているかも聞くことができて良かったです。

○ 児童は、作品に対して純粋な好奇心や興味を持って作品を見てたくさんのことを分析し感じていてすごいなと思いました。私は普段、描く側の視点で描くことを意識してみることが多くなっていましたので、今回純粋に作品を見て味わうことを教えてもらった気がしました。

教職2回生

○ たくさんの生徒が言っていたことですが、「美術って自由なんだと思った」という言葉が、とても心に残っています。そう思ってもらえたことも嬉しかったですし、逆に大切なことを教えてもらえたようにも思えます。参加して良かったです。

○ 自分の小中学校時代に自然に植え付けられてしまった絵画見方や表現方法が、今も抜けきれない

のですが、今回子どもたちの豊かな見方や感じ方に驚くとともに、そんな体験を互いにできたことを幸せに感じました。

○ 触っても大丈夫だと子どもたちに伝えると、穴に手を入れたり抱きついたりと楽しそうだったのが嬉しかった。あっという間の18分間でしたが、学ぶことがたくさんあり、これからの作品作りにも参考になる良い体験ができました。

○ 「自分とは違う意見や考え方を知って楽しかった」という子どもたちの感想が嬉しかった。作品に対する自分の見方や価値意識を深めたり広げたりすることは、美術を身近に感じて楽しむとともに、他視野との繋がりにもなるのではないかと思った。

専攻科1回生 ----------

○ 前回以上に活発に発言が飛び交い、ファシリテートが追いつかない時もあり、また制作者が意図していない気づきに驚かされた。子どもたちが、自分の考えを言いたくてうずうずしている姿が印象に残っている。ファシリテーターは、子どもたちと同じ目線に立たないと導く役割を果たせないと言うことを実感した。

○ 今回の学校の子どもたちは、絵画に対する観察力が非常に優れていると思った。描かれた対象物のことだけでなく、絵の具の材質や色使いなどの質問もあり、身が引き締まる思いをした。また、他のコースや学年の作品を見ることができて良かった。交流授業の前に、自分たちで鑑賞する機会があれば、事前に作品の魅力を知って臨めたと思う。

○ 自由に発言する子どもが多く、児童のペースになってしまった。自由鑑賞の時間に、好きな作品に食い入るように見る姿を見て、他の人が居るからこそ言える言葉と、一人だからこそ想う気持ち、その両方を大切にしていけたらと思いました。また、触れることのできる鑑賞は、作品の材質、表現、温度などを身体を通して感じることができるので、とても貴重な経験だと感じました。小学生だからこその素直で率直な意見を聞くことができて良い経験になりました。

専攻科2回生 ----------

○ 幼いからこその飾らない直球の感想を、予期しないところでしてくれた。絵に近づいて部分の観察から始まっていることから、細部から全体へと見方が発展している様子が分かった。

○ 大学での練習とは雰囲気が全然違い、進行の仕方が変わった。強く感じたのは、子どもたちはとても鋭いことを言ってくるということでした。「絵を下がって見ると違う風に見える。」と言う発言は、私たちにとっては当たり前の知識であるが、それに気づいたことに驚きました。

○ 大学生との練習とは違い、集中力が続かない、言うことときかないなど、なかなか思うように行かなかった。子どもたちにとって理解しにくいのでは無いかと思う私の作品に、思ったよりも反応があったり、良かったという子どもたちが多くいてくれて嬉しかった。私たち学生にとっても児童達にとっても得るものが多くあり、とても良い経験になったと思いました。

ウ　朝日新聞社の取材

前回の記者が興味を示してくれ、他の記者を派遣してくれることになった。今回は、前日に電話での事前取材があり、授業のねらいや進め方などについて詳しく説明することができた。当日も、脚立を設置しながら、様々なアングルで子どもたちやファシリテーターの様子をカメラに収めるなど、熱心な取材がされた。翌日には奈良版に掲載され、大学関係者や卒業生など多くの方々から良い反応が返ってき、広報の活動の大切さを再認識した。

現在も新聞は広報活動や情報発信の重要な役割を果たしているが、今回は参加した大学広報部員や県教育委員会指導主事が、リアルタイムにフェイスブックでアップしてくれたことも大きな反響に繋がったし励みにもなった。

朝日新聞　第3種郵便物認可

「海かな」「山かも」「楽しい思い出かも」

児童×芸短大生 美語る

作品を持参した奈良芸術短期大学の学生たちと一緒に鑑賞し、感じたことを語り合う授業が6日、大淀町立大淀桜ケ丘小学校であった。作品の魅力を自由に話し合い、子どもたちの感性を伸ばすのが狙いだ。

大淀桜ケ丘小で鑑賞授業

この日訪れたのは学生や卒業生20人。廊下や教室に並べた油絵や日本画、陶芸作品を、4年生44人と一緒に班に分かれて鑑賞した。

子どもたちは作品に近づいたり、離れたり。ほおに手をあててじっくり見る子もいれば、陶芸作品に抱きついて感触を確かめる子もいた。学生の多くは美術教員を目指しているといい、「どんな感想も正解だよ」と声をかけ、思いを引き出していた。

水を張ったビーカーの中に何枚もの障子紙を重ねた様子を描いた、青色を基調とした油絵を前に、何が描かれているか知らされていない児童たちは想像を巡らせる。

「波みたいなのが見えるから海かな」「下の部分は海で、上の部分は雲に覆われた空みたい」「緑色もあるから山かもしれない」

進行役の学生が語りかけた。「作者はどんな気持ちで描いたのかな」

「一枚一枚の紙が思い出で、それが積み重なっているの」「日記みたい」「よく見るとピンク色やオレンジ色もある。これは楽しい思い出かも」。話は尽きなかった。

作者の専攻科1年、石田芳実さん(20)は「子どもの想像力に圧倒された」と驚いた様子。作品を鑑賞した南美羽さん(9)は「自分の見方とは違った感想が聞けて楽しかった」と話していた。（浅尾千佳）

作品の前で自由に感じたことを語り合う児童たち＝いずれも大淀町下渕

「何か聞こえるかな」陶芸作品に耳をあてる児童

朝日新聞

平成27年2月7日(土)付

4　おわりに

今回の訪問授業では、日本画の精神性や洋画の抽象表現、陶芸の機能表現などについての理解を、作品とその作者がいるからこそ深められると実感した。本学単独での初の試みでもあったので、訪問校や担当教諭、各学年のリーダーとの連絡調整等を私が行ったが、今後は教職２回生を中心として訪問校や他学年のリーダーとの連携を図れるような仕組みに変えていきたいと考えている。

先日、桜井市教育委員会の社会教育課より依頼があり、平成27年８月22日（土）に親子による鑑賞の実施が決定した。本学の広報ブログを見ての依頼だったようで、広報活動の必要性を感じるとともに、学校教育から社会教育へと新たな広がりを見せていることを喜びたい。

参考・引用文献

(1)　Mite!　ティーチャーズキット1～３　　アメリア・アリナス　　淡交社　　2005

(2)　「私の中の自由な美術－鑑賞教育で育む力－」　　上野 行一　　光村図書出版　　2011

(3)　「対話による美術鑑賞の可能性－旅するムサビとの共同授業を通して－」　中川　賀照
奈良芸術短期大学　研究紀要　　平成26年度版